

いエネルギー同志の価格競争が始まって来たわけです。脱石油でしようか。それで、こういう事態をどうやって言いたいのは、売った買ったの一方的な勝負の商売はダメであって、売り手と買い手、産油国と消費国が互いに手を握り合い、話し合って安定するような供給、安定するような世界をつくるチャンスがきていると思うんです。そういう意味において、今年は日本のエネルギー、世界のエネルギーにとって大事な年であると思うんですよ。

貿易摩擦

外国との貿易摩擦が近年とくに高まってきているが、いろんな見方はありますけれどもね。一つは、やっぱり人生観の違いがあるんです。特に、ヨーロッパでは、案外、まだ階級組織が残っているんです。そういう意味では、日本が一番自由じゃないでしょうか。民族も単一民族であるし、上下の関係もないんだから、皆同じ間柄でしょう。天皇陛下、皇族は別にして、他は皆、同じでしょ

う。そういう国は案外ないんですよ。働いている人は皆、働く事に興味を持つ。大体、日本人は貧乏性ですからね。(笑)……

この日本ほどマスプロをうまく効率的にこなす国はないんですよ、自動車だって、あれは大体アメリカ、ヨーロッパから来たんですね。マスプロを一生懸命になつて皆んなでやるものだから、結局、問題なく日本のものになってしまったんです。マスプロに向く民族というのは、日本とアメリカとドイツでしょうか。例えば、フランスというのは名人芸の国ですね。先祖代々の機械を使って良いものを造る。そういう点を考えると、日本人があんまりいい洋服を着て、機能の高い、安いものをどンドン作って、フランスへ持ってくるといのは、フランス人の今の社会生活を、経済生活を壊す。という基本の問題が、彼らにはあるんです。

だから、日本人が考えなければならぬのは、良い物を作ったら少し高く売ったらいいんです。日本人同志が安く売り過ぎるんで

す。例えば、電算機は二千円位しかしないでしょう。機器産業はもっと高く売っていいんです。それをお互いあんまり競争しすぎるものだから変なふうになる。高く売れば、外国でもそんなに問題にならないのではないですか。

だから結局、逆の立場を言えば、日本だってアメリカからアルミニウムとか石油化学製品がどンドン来るのは困っているんですからね。やめてくれと言っているんですよ。お互いの話し合いでハーモニーをとっていかなければだめでしょうね。

日本がこれから本当に考えなければならぬのは、人間同志のつきあいをたくさんやり、信頼関係を得ることじゃないでしょうか。口先だけでなく、出来ることしか言わないということですね。これがこれから先、日本が発展していくのに必要なことじゃないでしょうか。

知識産業の振興

これからは、各地方の特色を生かした産業を考えていく必要がある

りますね。たとえば、熊本はきれいな空気に豊富な水、それに優秀な労働力とを十二分に生かした産業、そうICやLSIなどの知識産業を振興した方がいいんじゃないですか。もう、鉄網なんかはやらない方がいいと思いますよ。

熊本には、現在、三菱電機、日本電気がIC工場をやっていますよね。それと幸いなことに、熊本出身の立石電機の立石さんもね。それでね、又、本田技研とか日立造船とかの優良企業の進出があっていますよね、これらの会社が熊本に進出してよかったなあと思うふん開気を持たせ、持続させること、これが大事と思うんです。現在、これらの会社は、本当にそう思っているんです。これが、ひいてはテクノポリスの指定につながるんじゃないですか。聞くところによると、熊本が一番先行し、有力な候補地だそうですが。

その点、熊本の特色であるICやLSIなどの知識産業をどンドン振興すべきですね。昔から熊本は教育都市であったし、そういう意味からも知識産業はうまくいくと思えますよ。



一衣帯水の隣邦

高 江村



熊本に住みついて七年目になる。当初、熊本に定住を決めたわけは、病身の妻の療養には、気候の温暖な南国が良かったからであった。澄んだ空気とうまい水、緑の山々、そして県民の温かい人情に支えられ、妻は健康を取り戻しつつある。そして私にとって熊本は他国同地であるのに、私には違和感が余りない。それは妻が日本人であり、更に私が日本語をある程度上手に話せることもさることながら、それにもまして、熊本の人々の温かい人情に支えられた心のふれあいがあるからだと思ひ感謝している。熊本県は教育県といわれている。それは勿論、県教育が郷土愛に満ちた、社会

に貢献できる人づくりを積極的に進めているからでもあるが、その上これまでに多くの賢人が輩出しているからでもある。特に深く感銘したのは、我國の国父である孫文と深く交わり、且つ当時、文字通り多事多難を極めた孫文の革命運動を、積極的に支援した宮崎滔天志士が熊本県人であることであり、衷心より敬意を表している。

日中両国民の友誼は悠久な歴史につながる。特に熊本県は日本の西の玄関に位置しており、歴史、経済、文化等のつながりが深い。今、日本でも中国でも「一衣帯水の隣邦」と云う言葉をよく使うが、飛行機でとべば、一時間余りで上海に着く。東京よりも近い。六年前のことであるが、中国初代の陳大使が熊本に來た時書いた「雞犬相聞、友誼長青」という書を見て、今更のように、中国が近くにあるということを感じておしむじみと感じたものである。二年前、熊本市と桂林市が友好都市として結ばれたが、県と広西壮族自治区との友好関係締結の話も進んでいると聞いている。この広西壮族自治区も多分に漏れず、農業の開発が非常に遅れている。そこで、熊本県の農業を中心とした技術援助など、重要な国際的役割が大いに期待される。これはとりも直さず、日中兩國の子々孫々の隆昌をもたらすものと確信してやまない。

(中国出身)

民話

山鹿のほらふき男

(山鹿)



山鹿の竹ノ下のほらふき男は、肥後でも一番のほらふきでした。ある日、この噂を聞いて、筑後の大ばらふきがほらくらべを申し込んできました。さて、試合の日、会場には菊池川ぞいの村々の人々が見物に集まり、さながら山鹿の温泉祭のような賑わいでした。さあ、試合開始。ほらくらべが始まりましたが、どっちもどっちの大ばらふき。ああ言えばこう言うで、なかなか勝負がつかせません。「肥後のどこを探しても、筑後の赤ん坊にかなう者はいないだろう。何と生まれた時の重さが三十貫。その子の泣き声は、小栗峠を越えて山鹿まで聞こえた」と

「いいだろう。私について来い。」筑後の男が言え、山鹿のほらふきも負けてはいません。「大きいということなら、肥後の方がずっと上だ。何しろ、山鹿の日の岡山の孟宗竹は、回りが十丁、差し渡しが三丁もある大竹だ。朝日を受けるとその影が有明海にうつり、夕日を受けると阿蘇の山に影を落とす。」これを聞いた筑後のほらふきは、「それは珍しい。肥後の土産に國の者に話して聞かせたいから、是非その竹を見せてくれ。」と頼みました。「いいだろう。私について来い。」筑後のほらふきはもちろん、見物人もぞろぞろついて行きます。山鹿のほらふきは皆を連れてとうとう竹ノ下を一巡り、十丁も歩きました。そして言いました。「今、あなたが歩いた所が例の大きな孟宗竹のはえていた所だ。実は、その竹は、先程あなたが話した三十貫もある大きな赤ん坊が生まれた時、産湯を使うたらいのたがにする竹ひごに使うといつて筑後から買いに來られたので、売ってしまつた。その後、竹の切り口の輪の中に田んぼがで、畑がで、家ができて、この付近を竹ノ下と言うようになったのだ。」これには、さすがの筑後のほらふき男も降参して逃げ帰りました。